

『食後の唄』の二つの序

——白秋と李太郎——

高田瑞穂

地下一尺集第五、詩集「食後の唄」に寄せられた北原白秋の序は次のことばで始まる。

「世に奇異なるは『南蠻寺門前』『ドウバンの首』『食後の唄』の詩人、わが友木下李太郎の若き日の行状であつた。」ここに「奇異なるは」とあるのは、単に李太郎の英風を嘆じたことばではない。同じく「明星」に詩人として立ち、相ならんで「スバル」「屋上庭園」に主軸を為して、「互に刺戟し合い、影響し合い、熱狂し合つた」白秋と李太郎であつた。にもかかわらず李太郎の行状の中には、白秋にとつて文字通り「奇異」なものが在つたことの指摘であることは、白秋序自体によつて明らかである。白秋によつて描かれた李太郎の肖像は、自序における白画像に限り無く接近しながらも、ついに両者が相異なる二つの肖像画をなした事情は、著しく私の注目をひいた。もし李太郎の青春の日の行状を知ろうと思えば、直接この二つの長文の序に就く如くはない。これは、

新浪漫派の生活と心情とを描いた、史的記録と言うべきであらう。

白秋によつて描かれた李太郎像はこうである。

「彼の服装はかくのごとく黒く、而も亦訥朴であつたが、彼の惱漿は全く三角稜の多彩、彼自ら謂ふ所の万華鏡の複雑光で変幻極りなかつた。声色香味触、是等悦喜す可き官能の種々相に於て、彼は全く、初めて碧眼紅毛の邪宗僧を迎へた長崎青年のそれらの如く、時としてはまた初めて此の浮世絵の日本に面接した泰西人のそれらの如く、事毎に驚異し、瞠目し、仰視し鑑賞し、遂には彼自らをその恍惚無礙の極楽世界に魔醒せむとさへ欲するに至つた。(略)

彼は種々の舶来品——それは珍奇な多種多様のエチケツト、南蠻の異聞、ギヤマン、香料異酒、奇鳥、更紗の類——を吾徒の間に齎らした。のみならず、彼は又絶えず、その特殊な紅毛舶来の感覺を以て、新様の日本、油絵の江戸、銅

版の長崎、メツサの小土佐、薄荷酒中の鎗さび、西班牙外
套の花の昇菊を発見し諦聴した。あまつさへ、彼は清親の
錦絵の中に所謂文明開化のモンマルトルの酒舗を漁り、紅
提灯と紙の桜のかけに、かの阿蘭陀のラベイカ弾きの如
く、椅子の上にロチの女を乗せ、而してしみじみと夜の三
味線を爪ぐらせた。彼は比類稀な詩境の発見者であつた。」
今これを李太郎の自序によれば、こうである。

「お釈迦様の弟子たちなら、また孔子様の信者たちとして
も、かう云ふ根もない情動の泉に浸ることを、飛んだ邪見
として軽んじもするだらう。それを反省もしないで、何か
香料が旨い味のやうに、ひたすら弄ぶ人をば、卑しきもす
るだらう。予とても亦それは知つてゐる。だが佳い土耳古
の葉の紙巻を喫んだあとに、人さし指に残るやさしい臭を
懐しむことを知る人もあつてほしい。歇斯の里亜の素質を
持つて、鬱陶しい青年期を送つた経験のある人でなければ、
世の中のこんな亜爾可兎剣の真味を解することが出来
ぬ。

予が『食後の唄』の如きは孰れもこの種の、やゝ有害
な、然しとさしたる毒もない、魔睡薬の類である。(李)

「その時分の子の頭は万華鏡のやうにこたごたしてゐた。乃
至は秋の午後の雑草園の如く、鬱蒼として錯雑してゐた。
予は『道』に親まず、『学』に離れ、全く精神上の浪費者
であつた。

紅玻璃燈の下に、重く光る液体を充したる小高脚杯を前
に置いて、予は予の前の中に擾乱する亜刺比亞夜話の復活
を諦視した。その中には鯉の切身を持つて立つ大屋、中央
亜細亜の庫車クラウチから出たと云ふ塑像の仏頭、伝聞答師作の阿
修羅の首、乃至それよりも美しい豊竹昇菊の頬の輪廓、中
村児太郎の外郎売、松尾のどんつく、小登良の鎗さび、古
渡更紗のすれずれの唐艸、また檣古筆、杏仁の実の味など
が、歌の如く、螢の如く、初夏の電の如く、山羊の叫喚の
如く、汽船の跡に残る白浪の如く、洶湧し、巻舒し、回転
し、出没して狂奔した。

さう云ふ怠惰の生活の心に投げた悲哀は、凡て是れ『食
後の唄』の基本情調である。年代は忘れもしない、千九百
十一年乃至十二年のころである。」

白秋序は大正八年十月、自序は大正七年九月に成つた。白
秋の「雀の生活」は大正九年二月に上梓を見、一方李太郎は
大正五年以来、東都文壇を遠く、南滿医学堂教授として奉天
に在つた。この二人の境界の相違が、二つの肖像画のトオン
に反映していることは言うまでもない。だが、それだけでは
問題は終らぬ。

先ずここに引いた白秋の李太郎讚美が、けつして儀礼的な
必要に出たものでないことを言わねばならない。何故なら、
白秋の李太郎像は、とりも直さず白秋の自画像でもあつたの
だから。そして白秋の推重する、正にその点に於て、李太郎

は自己弁明に忙しい。「食後の唄」の出版について、「異常の喜悅を覚える」と書きつつも、他方「『余は尙或る執着を有する過去を持つてゐる。』どうもこれが予の本音であるらしい。」と記さずにはいられぬ李太郎であつた。この時李太郎にとつて、執着は価値感と結ばない。そこから傷心のひびきさえ生れた。

「ああ、ああ、過去といふものの、外看上豊富であつた蓄積は一体、どこへ消えて行つて了つたのか。暮が締まる。

音楽が止む。——そして今までの緊張とは裏はらの、頓と馬鹿らしいと云つたやうな、軽い腹立たしさが心に残る。」

既に明らかな如く、如上の引用に関する限りは、二つの肖像画の間に在るものは讚美と弁明との、いわば調子の相異である。白秋が「類稀なる詩境の発見者であつた」というに對して、李太郎が「全く精神上の浪費者であつた」というが如き相違である。この限りにおいて問題は無い。だが次の如く白秋がことばを続けるとき、人は如上の軽やかな調子の相違が、一つの予兆であることに気づかずにはいないであろう。

「然しながら、茲に考ふべきは彼は斯く麻酔せむと欲したにかかはらず、不思議にも自ら惑乱せられない聰明と理義の保持者であつた。彼はこれら鳩毒の爲めに殺す癡と愚と溺没とを敢て為なかつた。おお、此の七彩陸離たる不可思議國の風光の中に在つて、常に黙々として手に太き洋杖を握

りつつ徘徊する長身黒服の異相者、彼木下李太郎の浪面を看よ。」

ここに明らかな通り、白秋の「奇異」の感とは、美に惑乱せらるることなき耽美者とは、自己矛盾的存在ではないかという疑いであつた。白秋は、「類稀なる詩境の発見者」たる李太郎の感性の鋭さ、豊かさ、複雑さを知る点に於て、何人にも立ちまさつた同志であることを自ら知れば知る程、その「不思議にも自ら惑乱せられない聰明と理義」とに對して、共鳴し難いあるものを感じたのであつたらう。白秋にとつてそれは文字通り「不思議」であつた。言いかえれば、白秋の「奇異」の感とは、李太郎に「美」と「聰明」との對立、感性と理性との相剋を見た、ということになるのだと思う。

一般に李太郎は、感性と理性との調和の上に立つ詩人とされてゐる。

「かれの学芸生活は、山又山の如くふかく聳えて、長く引いた裾野の青に、その絢情花のよそほひを見せ、摘みとり、嘲り棄てんに任せると云つた風の態度であつた。」(日夏耿之介・明治大正詩史)

「最後まで知的内省的であつて、主知的性情と浪漫的趣味を融合しつつ、悠々と人生に高踏してゐた。」(吉田精一・日本浪漫主義研究)

かく見る時、李太郎は正しく小鷗外となり、柳村の直系となる。そして又その点に於て、これらの定説は揺ぎなき説

得力を持つている。そればかりか、李太郎にとつて一つの理想であつたものが、そこに明瞭に提示されてもいた。恐らくは、白秋の序も亦、かかる言説の一環と解され勝ちであるかも知れない。だが、理想は果たして当時において現実たり得たのだつたらうか。定説に於て調和と見たものを、白秋は矛盾相剋と見た。と同時に調和と見るか矛盾と見るかの対立はあつても、いずれも李太郎の内に感性と知性とが、二つのものとして認められる形に於て在つたという認識は等しかつた。そして李太郎自らも、しばしば次の様な事情を記している。

「わたくしの心は或時は自家撞着、また或時は前後矛盾の間に烈しく動揺する。而もこの動揺はいつも決して或る実行意志の爲めの醗酵状態たるものではなかつた。却つて戯曲等創作の動力となつた。わたくしにも意志本位の生活を求むる心があつた、が然しそれをばわたくしの趣味的の外生活が邪魔をした。」(支那南北記・滿洲通信)

この李太郎のことははかなり解りにくい点を持つている。然し、李太郎の内に、意志的行爲的なものと、趣味的情緒的なものとの二者が在つて、この間に対立相剋が起こり、その結果常に、趣味的情緒的なものが打ち勝つのを例としたという事情の筋道は辿ることができる。そしてこの事が、詩人の態度の根柢を形成した。私はこれを美に於ける生の統一、享楽主義と決論する前に、更にこの点を追う必要がある。

「千九百十年は我々の最も得意の時代であつた。『パンの

会』は毎週開かれて……」

李太郎の青春の華やかな日々を回想しつつメエゾン・鴻の巢、三州屋、永代亭の盛況を辿ると、自序の半近く、我々は突如として次の如き一節に出会う。

「——千九百十一年の頃である。予は自分の職業と、自分の周囲とを厭ふ心に日に夜に苛まれたことがあつた。偶々独逸の東洋美術研究家の——まだ若いGといふ学者が夫婦で日本へ来た。予は彼等に昵むにつけ、或る夜、自分が単独で欧羅巴に渡つて、その土地にあり附くことは出来ないものだらうかと相談をかけて見た。」

「さうですねえ」とその人は考えぶかく口をつぐんだ。」千九百十一年、李太郎二十七歳、医科大学を卒業した年である。「自らの職業」を厭う気持はともかくとして、「自分の周囲」を厭う心に日夜苦しめられたとは、如何なる事情であつたか。ここでもまた李太郎のことは充分に明瞭であるとは言い難い。ただ、「自分の周囲」ということが、主として文学における盟友たちを指したものと推察は誤らぬところである。とすると、李太郎には明治四十四年の頃に、既に文学を厭離しようという考えが在つたということにならざるを得ない。何故だつたか。この間の事情を物語ると思われるものに、散文詩「黒き扉の前にて」、小説「荒布橋」がある。今「荒布橋」の一節を引いてみる。

「予の二三の友人は、予の未だ嘗て一たびも婦女と抱擁せ

ざるの故を以て、到底予が羅曼底を脱することが出来まいと断定した。而して予の文学芸術を以て此羅曼底の所産となし、或は抑制せられたる予が性欲の変態となした。そして予に勤むるに、先づ吉原へ往け、そして考へる。其時始めて汝は一人前に成ることが出来るだらうと云つた。(略)

予は尠からず圧迫を感じた。文学宗教が果して女と酒に原くか。乃至予が到底羅曼底を脱することが出来ないか。爾來此問題は予の全心を奪ひ去つた。夫れ以来予は武装した。且絶えず自ら試し、自ら警めてゐる。すると今迄美しいと思つて居た女が予に無関心であり、恣なる空想も之を支配することが出来るやうになつた。また凡てのものの中に羞澁を感じなくなつた。而かも予の心は常に充実して寂しいといふ事が無い。『武装的平和』といふ字が、尤も善く今の予の心に適當してゐるだらう。但し此状態が永久のものであるかは併し未だ分らない。」

「荒布橋」は四十一年秋の制作で、恐らく李太郎の心が、意志的行爲の方向に強く傾いた折の作品であらう。このような「武装的平和」が所詮は一時のものでしかあり得ない事は、李太郎がその生涯を通じて、白秋のことばをかりれば「倭ちに顔を赤める処女の恥羞をさへ感ぜしめた」羞澁をついに脱し得なかつたという一事を以てしても判じ得るであらう。もともと武装的平和とは、戦争への契機をそれ自らの中に含む平和である。武装的平和から感得せられる充足感とは、究極

において、いつ始まるか知れない熱争への不安の裏がえしに過ぎない。李太郎にあつても、「絶えず自ら警めてゐる」ことが、すなわち「心は常に充足して寂しいといふことが無い」ことであつたのだ。もし李太郎の言の如く「美しいと思つてゐた女が予に無関心」になりつたとしたら、その時李太郎の自警は当然その存在理由を失う筈であり、それは又同時に、李太郎の心の充足の崩れ去る時でなくてはならない。李太郎において、自警という意志的なものは、それ自ら存在するといふよりは、不断に感性的なものに動揺させられることを前提とすることによつて成立するが如き存在であつた。意志的なものは、かえつて感性的なものうちに、その存在理由を求めねばならなかつた。この事情は、やがて、感性的なものもまた意志的なものの抵抗の中に、その存在理由を見出だしたということである。換言すれば、李太郎における感性的なもの、意志的なものの抵抗と俟つて、始めて感性的魅力を保持し得たということである。李太郎の感性が、女に近づこうと欲する時、李太郎の意志は女から遠ざかれと命ずる。女の魅力はそこに生まれた。したがつて、意志が遠ざけようとしないう女は、感性もまた近づこうと欲しない。同一精神におけるこのような二つのものの在り方は、必然的に人間精神のあらゆる積極性を奪わずにはいない。すべての決定的な決断、飛躍的な行為は、両者の相互牽制の間に見失しなわれていつてしまふ。この時、人は自己を厭わしく思い、自

己の周囲をわずらわしと感して、そのような自己と周囲とからの脱出を願うに到る。この時李太郎は、むしろ実生活と袂別するところに生れる高踏的享樂を信じ切るには余りに年若くありすぎた。李太郎の行為は、かくして「拮据」となり、李太郎の相貌は、かくして「渋面」を呈するに到つたのではなかつたか。

「再び云ふ。世にも奇異なるはわが友李太郎の若き日の行跡であつた。彼はまことに極秘境の憧憬者であり、最も進むだ探検者であつたが、遂に彼自身は邪宗の法皇に八年の長日月を奉仕して遂に清浄の童貞として老いて行つた、かの伊東ドン・マンシオの如く、結局謹嚴な淨身の童貞として、彼は彼自らの青春の初期を空にして了つた。」

白秋の「奇異」の感は正しく、前述の如き、李太郎における意志的なものと感性的なものとの相互牽制と、そこから引き起こされる行為の喪失に由来することは、ここに明らかである。私は白秋のことばの中に、明らかに「吉原へ行け」という声をきく思いを禁じ得ない。そして、白秋自らは、「予が幻覚には自ら真に感したる官能の根柢あり」(邪宗門・序)の態度に終始し、ついには、次のように歌うに至る人であつた。

しみじみと涙して入る君とわれ監獄の庭の爪紅の花

かかる白秋にとつて、李太郎の態度は、恐らくは一つの不徹底と映つたであろう。酒を理解する道は、唯一つ、酒に酔

いしれること——官能の詩人白秋にあつては、この官能享樂の道程にいささかの懷疑もあり得ない。かくして白秋は、生活と芸術とを素朴に混同しつゝ次から次へと、常に新なる官能の愉悅に立ち向かう。ついには異常に連り、悪にまぎれずにはすまぬ道行きであつた。

「聰明」な李太郎はこのような白秋の「邪宗門」に対して、「其詩章の第一聯と第二聯との間に殆ど智的合理は発見することが出来ない」(スバル・詩集邪宗門を評す)と言う。李太郎は明らかに白秋と別の立場に立つていた。李太郎は、生の混乱をあくまで拒否しつゝ芸術に仕えようと欲した。このように考える時、「やや有害な、然しさしたる毒もない、麻睡薬の類である」という「食後の唄」の自註は、その表現の軽さにもかかわらず、正しく李太郎の態度の真相の表白であつたと言ふことができる。李太郎においては、感性的なものとの意志的なものと相互牽制のバランスの上に、美の探求が続けられた。感性的なものも、意志的なものも、共に一方的なそれだけに飽満した充足が得られぬ内的葛藤の中に、李太郎の一見多情とも見える美の種々相への、次から次への発見が遂行されていつた。これに反して白秋の場合は、一つの美に飽満した所から次の美の陽気な探求が始まる。そしてもともと新鮮なものだけを悦ぶ感性的の本質によつて、対象は千變万化を余儀なくされていつた。ここに二人の詩人の作品の持つ、外見上の著しい相似が生れた。

私は、李太郎における感性的なものと意志的なものとの相互牽制を指して、調和、融合の語を当てようとは思わない。李太郎におけるこの二つのものは、むしろあくまで対立であった。したがって、李太郎の精神の動揺は、究極的に「あれかこれか」の、二者選一の形をとった。一つの極から他の極へと、絶えず動揺する精神の律動から、李太郎の数々の作品が生まれ出た。だが、問題の真の解決は、常に持ち越されねばならなかつた。だから李太郎は「あれかこれか」に一つの決着を与えようとした時、過去を顧みて、次のように記さねばならなかつた。

「今予は此小冊子を刊行しようとして、心に慙ちて躊躇する。予がわかき日の酔はもう全く醒めてしまつて、その時の歌には唯空虚な騷擾の迹と、放逸な饒舌の響とが残つてゐるのみであるのを知るからである。」

生涯の中にこのような内省を持つたか持たなかつたか。白秋と李太郎とを区別する一線が明らかにここに在つたと私は思う。そして李太郎の態度を不徹底と見た白秋の場合は如何なる貌を持つたか。「官能の根柢」あることを信じ、そこにたよつて、白秋は自らの道をどこまで徹底させ得たであらうか。一つの極論を言う。例えば、阿片、毒薬、アツシシユ、クロロホルム等々の新浪漫派の流行用語は、白秋によつて最もひんばんに、そして効果的に駆使された。だがこれらのすべては、如何に白秋の言語感覚に明瞭な色と香とを持つて映

つたにしろ、所詮はことばであるに過ぎない。官能享楽派の最も見易い限界がここに在る。それは、享楽に溺惑しようとする態度そのものに由来した。少くとも近代の詩人にとつて、表現とは醒めた意識の、全く意識的な営みでなくてはならず、官能の愉悅は、醒めた意識の消失に始まらねばならない。ここに享楽派に特有の、虚飾——ポオズが、局面の危機に際して、様々な大道具小道具共々に導入されざるを得ぬ理由があつた。

「私は涙を惜しむ。何らの修飾なく声あげて泣く人の悲哀より、一木一草の感覚にも静かに涙さしぐむ品格のゆかしさが一段と懐しいではないか。」（白秋・桐の花・桐の花とカステラ）

これは明らかに俗見であつた。修飾のいとまなく声あげて泣くべき時には、声あげて泣くことの中にこそ品格は生まれ出る。「品格のゆかしさ」とは、結局人間の具体的行為をばなれて、声あげて泣くか、静かに涙さしぐむかによつては區別され得ないのではないか。そのような省察を欠く時、「品格のゆかしさ」はそれ自身一つの孤立した目的となり、道具となる。白秋は早くも「桐の花」において、「感覚の根柢」を見失ひなつてゆこうとする。「桐の花」の非近代的ハイカラがそこに生まれた。「情緒から近代性を享受せんとする」（『夏歌之介・明治大正詩史』）白秋の態度に不可避な混冥であつたと、言うことができるであらう。「官能の根柢」を生原

理とする白秋にとつて、かかるハイカラは、明らかに不徹底でなければならなかつた。そして、先に白秋が李太郎の中に見た不徹底によつて李太郎は、今白秋に見たこのような不徹底からは免れることができた。李太郎の内に秘めた「あれかこれか」の苦惱は、ついに、内生活の空虚に無関心に、ひたすら趣味と情調のみに溺惑するが如き生を自らに許さなかつたのである。

「勿論すべての作家ははめをはずすものである。はめをはずす事が出来なければ、作品の創造は不可能であると言つていい。然しそれは作品の中の世界での出来事であり、もしくは頭の中の世界での出来事であつて、それが必ずしも日常生活の只中で外に現れなければならない法はない。もつとも、詩人、小説家、音楽家などが、日常生活に於て、常規を逸した行動を示しがちなのは、世間によく見る所であるが、その点では非常に慎重深く、厳格に反省的で、言はば十分道徳的であつた太田」(小宮豊隆・太田の思ひ出)

「吉原へ行く」ことが詩人の態度として徹底であるか、「行かぬ」ことが徹底であるか。小宮氏の言を待つまでもなく、それはどちらでもよいことなのである。それぞれの立場である。李太郎は作品の中でだけはめをはずした詩人、白秋は生活の中だけではめをはずした詩人であつた。

たまたま自然主義の盛時に當つて制作した二人にあつて、生活でもはめをはずした白秋に勝目の出たのは当然のことである。

あつた。だが、白秋の勝利は、ついに白秋をして真に近代的なものとの結びつきを永久に断ち切つた。そしてそのような態度の相違にもかかわらず、二人はともに、享楽派の代表的詩人であつた。その限りにおいて、例えば次の如き白秋批判は、李太郎もまたその幾分を甘受しなくてはならぬであらう。たとえそれが、常に過去に対して有利な立場に立つ後代の批判であるにしても。

「それは、明治大正のある時期に、富と遊惰とのある程度の持主が、異国趣味とダンディズムと官能的感溺とに苦痛と懷疑なしに身を任せて行つたことである。この異国趣味とダンディズムと官能的感溺とは、それが目立つだけそれだけその人間の内生活の空虚をあらはしてゐた。(略)眼は対象にひたと面せず、そのまはりを、しばしばそれを意識しながらただよふのにとどまる。対象をさがし、さがしあて、その上にしかと停まるといふ眼の機能は初手から拒否され、むしろそれは、怖れられ避けられてゐるといへる。そこで眼は、本来の機能を回避しつつか歌としてあらはれ出るため、とめ度のない喋舌で身を装はねばならぬのである。」(中野重治・斎藤茂吉ノート)

三十二歳の渡瀧以降における李太郎が、かかる「内生活の空虚」と如何に戦つたか。そしてこの困難な戦いに如何にして勝つたか。それらについては稿を改めるのが至当であらう。